

金沢で「住みたい」を提案

建築士 松原豊さん(32)



引き戸を開けると、ふわりと木の匂いが漂う。金沢市の天神町緑地を望む棟続きの町家2棟で、作業に励むのは南砺市出身の建築士、松原豊さん(32)。念願の建築事務所の開業へ、大工の父親と共に町家改修の真っ最中だ。

戦前に建てられた町家は大きな窓の縁側を、住まいとなる隣の古民家には天窓を設け、室内に光を取り込んだ。

「町家は薄暗くて寒い。そんなイメージを変えたくて」。建築士として町家改修を提案してきた松原さん自身が、

初めて「施主」となるこだわりの家である。

建築を学びたいと東北大を中退し、町家が集まる京都に移住、京都工芸繊維大に再入学して建築学を学んだ。工務店では町家改修のノウハウを学び、熟練の町家職人に

まねながら、

北陸で家づくりの仕事をするという夢をあためてきた。

「年明け」で工務店を送り出され、金沢城下と南砺地方を結ぶ旧街道沿いに、この町家を見つけた。目の前の道をたどれば、ふるさと福光につながっている。導かれるように購入を決めた。

京都時代、町家を直すのだから、暮らしを知るべきだと、自らも町家に住んだ。冬の寒さはこたえたが、土壁や土間は熱と冷気を蓄え、思いのほか過ごしやすいことも知った。

寒さは断熱材を入れ、薪ストーブを置けば防げる。傷んだ土台や柱は取り換えればいい。町家でも、うまく手を入れれば十分に住みやすくなる。「工夫一つで再生するのが木造住宅の面白ところですよ」と松原さんが話す。

事務所と住まいの仕事を終えたら、東山と野町に購入した小さな町家の改修に取り掛かるつもりだ。町家暮らしを希望する人に、改修町家の住み心地を体験してもらおう借家にする予定だという。

「住まなければ分からないことがある。半年でも、1年でもいい。暮らしを体験した上で、町家に『住みたい』と思ってもらえたら」と松原さん。金沢での町家暮らしから、住まいを提案していく。



緑地を望む棟続きの町家で改修作業に励む松原さん—金沢市天神町2丁目

川上光彦金大名誉教授



例のように、続いた2棟を様々なパターンで活用するのは賢い活用法といえる。

また金沢近郊から若い世代が来て、歴史的建築物の改修に関わることは頼もしい。今後の活躍を期待したい。

町家は伝統的様式の「タウンハウス」だが、個室を重視する今日的水準からするとやや狭小である。この

◇次回は30日です。